

広がりゆく  
支援の輪

東日本大震災

伝えなければならない100の物語

# もくじ

俺たちの故郷は、絶対に、復興する。  
お笑い芸人 サンドウイツチマンの「東北魂」

同じ中高生の人こそ、伝えたいことがある。

走り続ける、一人の女子高生の物語

美しい東北を再び取り戻すために。

ロツクバンド モンキーマジック

困っている人がいれば助ける。

琵琶湖と宮古の海を結んだ、ヨット部の友情

サツカーで、少年たちに笑顔と希望を。

鹿島アントラーズ 小笠原満男

桂島で見つけた、オリンピックよりも大切なものの

思い出を、再生させる。

桂島で見つけた、オリンピックよりも大切なものの

未来ある子どもたちに、明るい未来を。

プロスキーヤー 畑中みゆき

76歳のチャリティコンサート

確かにそこに、見えない力があつた。

なでしこ、ヴァルフスブルクの奇跡  
目の前にある、この風景を残すために。  
海を渡つた、女子大生が作った記録映画

215 191 167 145 121 97 75 51 29 7

男子のワールドカップと違つて、女子ワールドカップは大会ごとに新しいものが製造される。つまりなでしこジャパンは、4年後にこのカップをFIFAに返還する必要がない。

2011年という、私たち日本人にとつて大きな意味を持つ年に、21人のなでしこたちが勝ち取った黄金のカップは、日本が永久に保存する。

ずっと、ずっと先の未来。私たちは、きっとこんな会話を交わすはずだ。

「あの時は、本当に苦しかつたけれど、あきらめずにがんばって、この国を立ち直らせたんだよな」

そんな未来の私たちのすぐそばにも、あきらめない心の象徴であるワールドカップは、寄り添い続ける。

目の前にある、この風景を残すために。  
海を渡つた、女子大生が作つた記録映画

取材協力 菅野結花、山梨県立大学

写真提供 前澤哲爾

編集担当 菅原悦子

校正 上埜真紀子

西元宏美

## 生まれ育った陸前高田市

大震災から2週間後。菅野結花は変わり果てた故郷を前に、がく然と立ちつくした。

「たしか、このあたりに家があつたはずなのに……」

不安定ながれきの山を歩いた。中学の頃から劇団の練習で使っていた公民館も、3年前まで通っていた高校も、つい2か月前に成人式をした市民会館も……。

「何もない……」

町も、人も、何もかも。みんな、どこへ行ってしまったんだろう？

結花は、心も体も迷子になってしまいそうだった。生まれ育った町。けれども見慣れない光景に、ショックと戸惑いが隠せなかつた。

1990年11月17日、結花は、岩手県陸前高田市に生まれた。

家から自転車で20分ほどの距離には、松の大木が並び立つ美しい海岸が広がつている。悠久と流れる大きな気仙川や、緑豊かな自然に恵まれた田舎町だ。近所同士も仲がよく、旬の魚のおすそ分けも恒例だつた。

「今日は、ホタテをいただいたよ」

学校から帰ると、母が言う通り台所のシンクに大きなホタテがぎつしり。スプーンを差しこんでみると、まだ生きているほど新鮮だ。潮の香りがする獲れたての魚介を、子どもの頃からたっぷり食べて育った。

家族は両親と、二人の兄、弟に囲まれた四人兄弟。そんな男ばかりの兄弟で育つた影響もあって、結花は小さい頃から活発な女の子だった。

中学3年生の時には、友だちといっしょに地元の小さな劇団に入つて稽古に明け暮れた。高校でも演劇部で練習に励みながら、生徒会の副会長もつとめた。好奇心が旺盛で、人と話をしたり、何かに挑戦することが大好きだった。

「大学は、関東方面に行つてみたいな」

とくに目標があつたわけではないが、漠然とした好奇心だった。

「結花なら、どんな大学や学部を選んでも楽しめるはずだよ」  
担任の先生がそう後押ししてくれて、結花には大きな自信になつた。そして、山梨県立大学の国際政策学部国際コミュニケーション学科へ進学。持ち前の行動力で演劇部、吹奏楽部、華道部など、好奇心のおもむくままにサークル活動を楽しんだ。

さらに2年生になると、一枚の貼り紙に目が止まつた。メディア関係の授業を受講

していた、前澤哲爾教授の課外ゼミだ。

そこには、「やまなし映画祭のボランティアスタッフ募集」と書かれていた。

「なんだかおもしろそう！」

いつもの直感だつた。やまなし映画祭は、毎年山梨県で開催される注目の映画祭だ。会場設置や運営などのボランティアなら、映画に詳しくない自分にもできるだろう。開催は2011年3月14日の予定だつた。この「やまなし映画祭」が、後に結花の人生に思いがけない広がりを与えることになるとは、この時はまだ知る由もない。

大震災と見えない安否

3月11日の昼下がり。外は寒く、まだ吐く息も白い。結花は前日から泊まつていた友だちの家を出て、大学近くに借りている自宅のアパートに戻つた。玄関のドアを開けて、ふとかばんを下ろそうとした瞬間、足元から大きく横にグラつく揺れを感じた。とつさに玄関のドアを開けて、外へ飛びだした。周囲の電線が大きく波打つようになり、子供の頃から、地震には慣れていた。冷静にようすをうかがつていた

が、この日は夕方から塾のアルバイトが入つてゐる。気持ちが少しあせつっていた。

一早就到着して荷物をまわす。生徒を待つやうな木立にはいりながら、  
揺れが落ち着くと部屋に戻り、すぐさまシャワーを浴びた。

じんおお  
ゆうか  
しんげん  
かくにん  
だいじょうぶ  
じゅんび  
む

揺れが落ち着くと部屋に戻り、すぐさまシャワーを浴びた。  
結花は震源を確認することなく、早々に準備をしてアルバイトへ向かつた。

じゅくちょう  
塾長との会話で、震源は岩手のほうらしいとわかつたが、塾にはテレビもラジオも置いていない。故郷で何が起きているかも知らないまま、結花は授業をこなした。  
じたい  
事態の大さを知ったのは、塾の授業を終えて帰宅した深夜12時近い頃だ。SNS  
 сайiode、みんながざわついている。

「インターネットでテレビが見られるから、見て！　早く！」  
友だちにうながされると、結花の目に信じられない津波の映像が飛びこんできた。  
「え、うそでしょ……？　なんで私の故郷の名前なまえが載のつてるの!?」  
画面の右上にある、陸前高田の文字。一瞬にして凍こおりついた。家族に電話でんわをしたが、  
つながらない。当然だ。頭が真まつ白しろになつた。それでもメールも入れた。  
「お願ねがい、どうか、どうか無事ぶじでいて……」

コミュニティーサイトの書き込みや、安否情報の確認サービスなどを片つ端から調べた。万人へ広く発信するテレビでは、本当に知りたい安否情報がわからぬ。津波は具体的にどこまできたんだろう？　家族や友だちは無事なの？

貼りつくようにパソコンを見つめる。そんな時、イヤな予感は的中した。連絡のつかなかつた友だちの訃報をインターネットで見つけた。中学の頃から仲よしの男の子だ。北海道の大学へ行っていた彼は、ちょうど春休みで、震災当日の午前中に帰省したという。悲しみというよりも、まったく実感がわかないのが正直な気持ちだった。

結花の家族の安否が、ようやくわかったのは震災から3日後のことだつた。N T

Tの災害伝言サービスから、知らない男性の声がそれを伝えていた。

「家族は無事です。家と犬はダメでした」だそうです

安堵のため息と同時に、麻痺するような鈍い感覚が心の中に渦を巻いていた。

か  
は  
こきよう

しょくりょう  
食料やウエットティッシュ、歯<sup>は</sup>ブラシなど、家族<sup>かぞく</sup>が必要<sup>ひつよう</sup>だろうと思うものを、結花<sup>ゆうか</sup>

はかばんいつぱいに詰めこんだ。震災から2週間後、山梨のアパートから陸前高田へ向かつた。現実を知る恐怖よりも、一刻も早く現状を知りたいという気持ちが大きかつた。

避難所に指定されている高田第一中学校体育館。実家のあつた場所から、坂道を

5分くらい上った場所だ。結花の母校でもある。家族はここにいる。

昼頃に到着すると、体育館は驚くほど多くの被災者でごった返していた。おそらく600～700人はいるだろう。しかし、当初は1200人もの人々がここに避難していたと、後で聞かされた。

「あ、結花ちゃん！ お母さんならたぶん、お昼ご飯の準備をしてるよ」

受け付けの女性が教えてくれた。母はこの避難所の厨房を任せられていた。すると、

「おう、結花」

と、まるで男友だちのような調子で、明るく食事を運んでいる母がいた。

よかつた、いつもと変わらないお母さんだ。

震災当日、母は津波が襲うギリギリまで家にいたという。近所の人たちと、大丈

夫かな、車で逃げたほうがいいかな、などと立ち話をしていたのだ。

「犬を車に積んで、さあ出ようと何気なく振り返つたら、大きな砂煙がバーツと迫つていてね。もう必死に、そのまま走るしかなかつた。もつと早く逃げていれば、フレチヤチヤも助けられたのに……」

たくましく映っていた母が、すっかり肩を落としてうつむいていた。厨房では精

いっぱい、気丈に振る舞つていたのだ。

「車で逃げていたら、きっと危なかつたと思う。お母さんが無事でよかつたよ」

結花は避難所に滞在している間、母といつしょに厨房の仕事を手伝つた。

結花の父は、陸前高田市役所の水道課に勤務している。震災当日は水道点検で外出しており、地震直後に高台に避難して無事だつた。水道課は市民の生命にかかわる仕事だ。結花が帰省した時も早朝から夜遅くまで働いていたため、会話ができる時間もほとんどなかつた。口数は少ないが責任感の強い父を、結花は尊敬していた。塾のバイトも無理を言って代わつてもらい、演劇部の稽古も休みをもらつて、結花は避難所に1週間弱滞在した。午前中は、自宅のあつた場所に足を運んだ。

「少しでも、何か家のものが残つていなかな」  
毎日探し歩いたが、何も見つからなかつた。見慣れた景色は、もうそこにはなかつ

た。町は湿つたがれきに埋もれ、鼻をつんざくような潮の臭いが漂つていてる。

道もなければ、車も人も通らない。今まで遠くに見えていたはずの海は、さえぎる建物を失つて妙に近くに感じた。

3年前に卒業した岩手県立高田高校に行つてみた。校舎はむき出しの鉄骨を残していた。3階からしか見えなかつた海が、今は1階から見えてる。

生徒会室にあつた整理しきれないほどの資料は、どこへ行つてしまつたんだろう。生徒会室の入り口には、ひつそりと献花がたむけられていた。

避難所にいると、いろいろな人たちの安否情報が耳に入つてきた。  
結花は、今回の津波で中学の友だちを三人亡くした。

津波は大切な思い出を奪い去り、悲惨な光景だけを残していった。いつか、この悲惨な光景すら、何事もなかつたかのようにキレイになくなつてしまふのだろう。そう思うと、がれきすら惜しくなるほどの複雑な苦しさがこみあげてくる。

これが現実なんだ……。結花は、持参していたデジカメのシャッターを押し続けた。

「少しでも今、目の前にあるこの光景を残したい」

## 写真では伝わらない

山梨に戻ると、故郷で見た光景はまるで幻だつたかのよう、普通の日常生活が流れている。当たり前に道路があつて、車が走つたり人が歩いたりしている。当たり前に店があつて、欲しい時に欲しい物が買える。着たいものを着て、会いたい人に会える。今まで当たり前と思つていたことが、奇跡のように思えた。

結花は陸前高田で撮つてきた写真を、SNSサイトに載せた。自分自身のために残したくて撮つた写真。みんなの目には、どう映るんだろう。すると、

「写真を見たよ」

という大学の親しい友人が、こんなふうに続けた。

「でも、気を悪くしないでほしいんだけど。どの写真もいつしょに見えちゃうんだ」「どれもいっしょ」

結花にとつては、どれもまったく別の風景だ。「これは家」、「これは高校」、「これ

は公民館」……。一つひとつ、どれも特別な思いがある。でも、他人から見たら思い出も愛着もない、被災地のただの一風景でしかないんだ。もちろん、彼女はまったく悪

くない。

「写真じや、伝えきれないんだ」

じやあ、どうしたらもつと身近に感じてもらえるだろう？

一枚一枚に切り取られた風景ではなく、もつと空間の広がりや奥行き、空気感を伝えてたい。もつとリアルに記録できる手段で、この現状を残したい。

ならば、写真よりも映像のほうがずっと効果的ではないだろうか。

「映像で残すことはできないかな」

## 映像で「残す」ということ

結花がボランティアスタッフとして参加していた「やまなし映画祭」は、自粛ムードも手伝って2010年度の開催を中止。次の2011年度「やまなし映画祭」が、11月に開催されることになった。

初回の企画会議が開催されたのは、結花が2度目の帰省をした後、5月頃のことだ。前澤教授はこの日、やまなし映画祭の企画顧問をつとめる、崔洋一監督を招いていた。ビートたけし主演の『血と骨』など、数々のヒット映画を手がけている有名監

督だ。ほかにも映像関係で仕事をしている人や、マスコミ関係者も駆けつけている。結花にはピンと背筋が伸びるような、心地よい緊張感があつた。

ひと通りの話を終えた後に、前澤教授が言った。

「最後に、何か聞きたいことがある人は？」

結花は、どぎまぎしていた。本当にこの場で言つていいものだろうか。でもフツフ

ツとした思いがある。よし、言うだけならタダだ！

「ハイ！」

手を挙げた瞬間、みんなの視線がいっきに集まつた。ゴクリと息をのんで立ち上がる。

「実は、私の故郷が大きな被災を受けました。それを映像に残したいと思うんです」

すると、崔監督がまっすぐに結花の目を見据えてこう言った。

「それはぜひ、君の手で撮るべきだ」

思わぬ力強い言葉だった。周囲の大人たちも、みな背中を押してくれた。

「僕にできることがあつたら、なんでも言つてね」

「カメラの使い方なら教えてあげるよ」

実は、映画を撮りたいと言つたものの、結花は映画どころかビデオ撮影すら、ほと

んど経験したことがなかった。まつたくの素人だ。映画はほとんど見ないし、とくに好きだったわけでもない。ましてや、撮った映像を広く公開しようという思いでもない。ただ、自分自身のために「残したい」という気持ちだけだつた。小さなハンディカムカメラ、三脚、マイクなど、機材はすべて前澤教授が貸してくれることになつた。不安もいっぱいだが、支えてくれる人たちがたくさんいる。「もう後には引けない」

## はじ 初めての映画撮影

何から今までが、初めての経験だ。映画の構成、出演者集め、スケジュールの調整、撮影場所の設定、撮影、編集……。気が遠くなるような作業だ。

映画は、被災者九人のインタビュー形式で構成することにした。最初から構成を決めていたわけではない。映画を制作することになつて、まず母に相談した。

「お母さんに手伝えることがあつたら、なんでも言つてね」「ありがとう。誰かインタビューに答えてくれそうな人、いるかな?」

すると母は、同級生の親たちに声をかけ、インタビューに答えてくれるという五

人を集めてくれた。母自らも、出演することを承諾してくれた。

同級生には結花が声をかけ、三人が集まってくれた。

撮影日は、7月と8月に行つた計5日間。

前澤教授は、甲府から陸前高田まで約

650キロもある距離を、一人で運転してくれた。カメラのアシスタントとして、プロの映像関係者も一人同行してくれた。

撮影では一人につき、1時間くらい話を聞いた。みんな昔からの知り合いなので、快く引き受けてくれた人たちばかりだ。それでも、カメラがあると最初は緊張する

はずだと思つた結花は、いつも最初に言うように心がけた。

「インタビュージやなくて、普通の会話をしてくれれば大丈夫ですよ」

結花自身も質問や返答は、会話をするように意識した。常に疑問形というよりも、

「そうですよね、私もこうだつたんですよ」という具合だ。

そうすることで、みんなが本当に会話をする姿勢に入つてくれたのがうれしかつた。中には、家族を亡くした人もいる。申しわけないという気持ちもゼロじやなかつた。しかし、陸前高田を離れていて、故郷の確かな今を知りたいという気持ちが、いつ

そう強くなつたのも事実だ。一つでも多くの現状を知りたい。

人の心に土足で踏みこむような後ろめたさもあつたが、それよりも本音で話がしたいという一心で撮影に臨んだ。そして、故郷と山梨を往復するたびに、当たり前ではない日常への感謝を実感する。

「いろんな人たちがいてくれて、今日一日が守られているんだな……」

映画のタイトルは、そんな思いから『きょうを守る』にしようと決めた。

撮影を終えると、次は至難の編集作業が待っていた。インタビューと建物の撮影素材を合わせて、全部で11時間ほどある。これをどう90分の作品に収めるかが勝負だ。まずは、その人の印象に残るカットを、ギュッと凝縮してピックアップしてみた。

「え？ 絞りに絞つたのに5時間もある！ どうしよう……」

そこで、インタビューのセリフをテキストに書き起こし、色分けすることにした。たとえば、なつかしんでいるセリフは赤、実感がないというセリフは青、というように。セリフの色分けをして、あらためて気づいた。  
「みんな体験はそれぞれ違うのに、感じている心の部分は重なるものがあるんだ」

そうして『記憶』、「ギャップ」、「わかない実感」など、8つの柱が立った。インタ



ひなんじょ  
避難所での撮影のようす。

ビューオーも一人ずつ、その8つのテーマにごとに切り取って、構成していこう。

インタビューを切り取る作業も、困難を極めた。話を切り取る位置によつて、その前まで言つていたことの意味合いが大きく変わつて受け止められてしまうこともある。たとえば結花には心にグッとくるシーンがあつた。小学校の頃に通つていた水泳教室のコーチでもある堺昌子さんが、「顔を洗うだけで、息苦しくなつちやう時がある……」

そう言つて、涙を流すシーンだ。

この部分だけを使わるのは、きっといやな思いをされるだろう。でも、後から見返した時に、あらためて心に刺さる場面だつた。このシーンは入れたい、でもつらい思いをさせるのはいやだ……。そんな葛藤や選択の連續だつた。

結局、映画祭当日まで2週間、一人で作業にかかりつきりの日々だつた。

## 「やまなし映画祭」での初上映

11月19日、やまなし映画祭の当日。その本番直前まで編集作業に追われていた。「まだですか!?

前澤教授の催促の電話に、心臓がビクンと高鳴る。

「はい、あと15分くらいで!」

そんなやりとりを何度も繰り返しながら、ようやく90分の映画が完成した。百貨店の最上階にあるイベント会場へ急ぐと、100名くらいのお客さんであふれていた。

新聞やテレビで何度も取り上げてもらつた影響だろう。結花の作品は、最後の上映だ。どんなふうに受け止められるか怖い気持ちもある。自分の故郷で、自分の知り合いや自分が話していて、自分にとつてはホームビデオみたいなのだ。どうしても主観が入つてしまい、客観的な目を持つことが難しくなる。

しかし上映後、そんな不安を打ち碎く声を聞くことができた。

「これからも、撮り続けてください」

あるテレビ関係者が、そう言つてくれた。また、

「被災者の生の声が伝わってきて、とてもよかつた」

そんなふうに、身近に感じてもらえたこともうれしかつた。

たぶん、記憶は薄れていくものだ。それは仕方のないこと。しかし感情の部分で、

「こういう津波がくる前に、逃げなきやいけない」

そんな危機感みたいなものが、映画で残ればいいと結花は思つていて。

この映画 자체、人の支えがなければ動かなかつたものだ。観客もいなければ成り立たないものもある。映画の主題歌『ほしざらとてのひらと』を提供してくれた、アーティスト・覚和歌子さんとのつながりも、思いがけない偶然だつた。結花が大学2年の時、プラネタリウムを見に行きたくて、「宇宙と科学」という授業を3回だけ受けたことがある。その授業を教えに来ていた山梨県立科学館の職員が、結花の映画のことを新聞で知り、連絡をくれたのだ。

「私の友だちの覚さんという人が、こんな曲を作つたんですよ。よかつたら聴いてみて」  
結花は歌詞にじつと耳を傾けて、「ほしざらとてのひらと」という曲を聴いた。  
3月11日の星空について、いろいろな人から話を聞いて作つた曲だという。胸に沁みるような、じんわりやさしいものが伝わつた。がんばれ、と励ますような歌詞ではなく、いっしょに寄り添うようなところが心に響いた。結花は、すぐに返信した。「とてもいい曲ですね。ぜひ、何かコラボレーションできたらいいですね」それからいつきに、話は具体的に進んでいった。当初は主題歌を入れることなど、

まつたく考へていなかつた。結花はあらためて思う。  
「本当にいろいろな人たちに守られて、私はここにいるんだ」

### 思いがけない反響と広がり

やまなし映画祭の上映後、映画『きょうを守る』の反響は勢いを増して広がつた。

「うちの高校で、ぜひ上映させてもらえませんか？」

そんな問い合わせが、山梨県内を中心にして東京、静岡など全国から集まるようになつた。おもに中学や高校、大学、イベント団体の催しなどで上映されている。

最初は新聞各紙やN H Kニュース番組などのテレビ報道がきっかけだつたが、回数が重なつていくうちに、口コミで人から人へと広がつていくことも多くなつた。はじめから広く上映することを想定していなかつたので、手さぐりで決めていくこともある。上映会の際はDVDを買い取つてもらい、その代金は義援金として陸前高田に寄付することにした。そして、地元に少しでも恩返しできることができがうれしかつた。

驚くことに反響はさらに海を越えていつた。やまなし映画祭で上映した翌月。N H K国際放送を見たという、アメリカの大学で日本語を教えている畠佐一味教授か

ら、

「『きょうを守る』の、英語字幕を作りたいのですが」というメールが届いたのだ。

「日本語の上級生でも、ああいつた自然な会話を聞き取るのは難しい。もし字幕がついていたら、自分の生徒たちにも見せることができるのにな」

畠佐教授は、そんなふうに思つたそうだ。字幕プロジェクトはさつそく進み、畠佐教授の呼びかけで12校60名もの学生が参加する大がかりなプロジェクトになった。自分の映画に興味を持つてくれる海外の学生がそんなにもたくさんいることが、花はうれしかった。そして、4月には英語字幕が完成された。

「なんてテキパキしていて、勢いのある方なんだろう」

そんな印象を持っていた畠佐教授から、さらに思わぬメールが届いた。  
「日本語学校のプロジェクトで、上映会とレクチャーをしていただきたいのです」  
信じられない展開にただ驚くばかりだつたが、好奇心旺盛の結花が断るはずがない。  
大学4年生の今は、授業も少ないので大丈夫だろう。

「はい、もちろん行かせていただきます！」



大学3年生の夏、初めての映画制作に取り組んだ菅野結花。

6月中旬に渡米し、大学の寮に1か月滞在。2か所の上映会に立ち合い、レクチャーはすべて英語で行う。畠佐教授に何度もチエックをしてもらう必要があった。海外に長期滞在するのは初めてだつたが、日本語を学んでいる学生たちと1か月いっしょに生活していたことで、とても仲よくなれたことも大切なつながりとなつた。「日本は遠いし、今まであまり大きな問題としてとらえていなかつた。気づかせてくれて、ありがとう」

「もし自分の故郷でこんなことが起きたら、ということを真剣に考えたよ」今回の大地震や日本について、そんなふうに身近に感じてもらえたこともうれしかつた。家族や故郷を大事に思う気持ちは、海を越えても同じだということにもあらためて気づかされた。

ユタ州立大学の上映会で知り合つた人が、ニュージーランドの領事館に映画のDVDを持っていったことで、ニュージーランドでの上映も計画されている。

こうした広がりは、映画を作つた力ではなく、それを拾つてくださる人たちのおかげ』だと、結花は常に思つてゐる。

2012年9月時点で、日本国内では全国各地で60回以上、上映。実際に6000人

以上が見ていることになる。海外では、アメリカの大学で計15回上映されたほか、トルコ語字幕も完成。韓国語字幕も制作中だ。

### 故郷に寄り添つていける記者に

結花の大学卒業後の就職先は、地元・岩手県の新聞社に内定した。  
前澤教授の授業をとつていたことや、元N H K記者の先生がいたこと、やまなし映画祭の取材を受けたこと。いつも、結花のいちばん身近にいる社会人が『記者』だつた。そして、つらい時に寄り添つてくれる記者こそ、信頼できだし、支えになつたし、すてきだと憧れる部分が大きかつた。

配属先はまだ決まっていないが、地元の岩手で記者になることが目標だ。『震災の問題はおそらく今後10年、20年、もしかしたら30年……、ずっと向き合つていかなればいけない問題です。前向きなニュースも、悲しいニュースも、全部いつよになつて寄り添つていけるような記者になりたいです』

喜びも悲しみも、より身近に共有していきたい。  
復興とともに成長していく、そんな記者としての結花の新たな一步が始まる。

NDC 913

東日本大震災 伝えなければならない100の物語

第8巻

## 広がりゆく支援の輪

学研教育出版 2013 240P 19cm

ISBN 978-4-05-500997-3 C8340

2013年2月20日 初版第1刷発行

発行人	土屋 徹
編集人	川畠 勝
発行所	株式会社 学研教育出版 〒141-8413 東京都品川区西五反田2-11-8
発行元	株式会社 学研マーケティング 〒141-8415 東京都品川区西五反田2-11-8
印刷所	大日本印刷株式会社
DTP	株式会社新後閣
アートディレクター	平野篤史 (DRAFT)
デザイナー	川上恵莉子 (DRAFT)
取材・文	各話ごとに記載
写真協力	各話ごとに記載
編集スタッフ	各話ごとに記載
企画編集	浦山真市 (学研教育出版)

### 【この本に関する各種お問い合わせ先】

#### 〈電話の場合〉

- 編集内容については、03-6431-1580（編集部直通）
- 在庫・不良品（乱丁・落丁など）に関しては、03-6431-1197（販売部直通）
- 学研商品に関するお問い合わせは、03-6431-1002（学研お客様センター）

#### 〈文書の場合〉

- 〒141-8418 東京都品川区西五反田2-11-8  
学研お客様センター『東日本大震災 伝えなければならない100の物語』係

© Gakken Education Publishing 2013 Printed in Japan

本書の無断転載、複製、複写（コピー）、翻訳を禁じます。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、  
たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。  
複写（コピー）をご希望の場合は、下記までご連絡ください。

日本複製権センター <http://www.jrcc.or.jp> E-mail:[jrcc\\_info@jrcc.or.jp](mailto:jrcc_info@jrcc.or.jp)  
TEL 03-3401-2382

国（日本複製権センター委託出版物）

学研の書籍・雑誌についての新刊情報・詳細情報は、下記をご覧ください。

学研出版サイト <http://hon.gakken.jp/>